

5.

国際研究ネットワーク

- 1) 海外研究交流
- 2) 国際共同研究プロジェクト
- 3) AIT ワークショップ
- 4) INTPART プロジェクト
- 5) JAWS
- 6) 国内外招聘研究者一覧

1) 海外研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2021 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

＜アジア・オセアニア＞

黄長玲 (Chang-Ling Huang) (国立台湾大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施、論文の執筆。(本報告書 85 頁参照)

楊婉瑩 (Wan-Ying Yang) (台湾国立政治大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施、論文の執筆。(本報告書 85 頁参照)

Ah-ran Hwang (釜山大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性的性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆(本報告書 85 頁参照)。

Jinock Lee (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性的性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆(本報告書 85 頁参照)。

Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表性的性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆(本報告書 85 頁参照)。

共著論文 “It’s Money that Matters in the End: the Impact of Gender-targeted Public Funding on Political Parties and Women Candidates in South Korea.” 執筆、*International Political Science Review* の特集に投稿

<アジア・オセアニア>

Jiso Yoon（韓国女性政策研究院国際協力センターセンター長）

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

申琪榮が韓国女性政策研究院の Visiting Scholar として当該研究院の研究プロジェクトに対する諮問、研究交流、国際フォーラムの基調講演を行った。

Devin K. Joshi（Singapore Management University 准教授）

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

コンラート・アデナウアー財団（ドイツの政治財団（シンクタンク）、現理事はメルケル元首相）のシンガポールオフィスが支援する共同研究プロジェクト「Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study」の研究代表者。申琪榮は共同研究者として当プロジェクトに参加した。研究成果は書籍 *Substantive Representation of Women in Asian Parliaments* として 2022 年 8 月に Routledge 社から出版される（本報告書 84 頁参照）。

Lucetta Y. L. Kam（香港浸會大学准教授）

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

2022 年 2 月 24 日開催の IGS セミナー “Takarazuka as Gendered Landscapes: Transculturality/Translocality of Fandom and its Possibilities”（宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性）に講師として招聘した（本報告書 62 頁参照）。

鐘仁耀（華東師範大学教授）

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している（本報告書 88 頁参照）。

李晶（華東師範大学副教授）

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している（本報告書 88 頁参照）。

張継元（華東師範大学講師）

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している（本報告書 88 頁参照）。

<アジア・オセアニア>

王橋（中国社会科学院研究員）

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー」において共同研究を実施している（本報告書 88 頁参照）。

Chia-Ling Wu（国立台湾大学教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

Society for Social Studies of Science（4S）年次学会（カナダのトロント開催予定だったがオンラインに変更）で、Chia-Ling Wu 氏他、台湾研究者 1 名、日本人研究者 2 名と仙波の計 5 名でワークショップ

「Assisted Reproductive Technology and Third Party Reproduction in East Asia: Japan and Taiwan」を企画し、2021 年 10 月 9 日に同ワークショップと一緒に登壇し、報告および討論した。

Yu-Ling Huang（国立成功大学助理教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

Society for Social Studies of Science（4S）年次学会（カナダのトロント開催予定だったがオンラインに変更）で、Yu-Ling Huang 氏他、台湾研究者 1 名、日本人研究者 2 名と仙波の計 5 名でワークショップ

「Assisted Reproductive Technology and Third Party Reproduction in East Asia: Japan and Taiwan」を企画し、2021 年 10 月 9 日に同ワークショップと一緒に登壇し、報告および討論した。

Ani Soetjipto（インドネシア大学准教授）、Avyanthi Azis（インドネシア大学講師）

【担当】平野恵子（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

共同研究を行っているインドネシア大学政治社会学部国際関係研究ユニットのメンバー。Soetjipto 氏、Azis 氏が主宰する研究会「政治的ディアスポラ——アジア地域におけるインドネシア人移住労働者保護へ向けて」第 5 回研究会参加（オンライン形式、2021 年 6 月 25 日）。また Avyanthi 氏には、7/23 実施 IGS セミナー「ジェンダー・エスニシティ・技能実習制度」にディスカッサントして登壇いただいた（本報告書 47 頁参照）。

Deborah Dempsey（スウィンバーン工科大学准教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

Deborah Dempsey 准教授と、ラ・トローブ大学の Fiona Kelly 教授が編著者となり、2022 年 Cambridge University Press から出版予定の *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* という書籍の中の 1 章“Challenges to donor anonymity in Japan”を分担執筆しているため、Dempsey 氏とは頻繁にコンタクトをとった。

<アジア・オセアニア>

Fiona Kelly (ラ・トロープ大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

Fiona Kelly 教授とスウィンバーン工科大学の Debora Dempsey 准教授が編著者となり、2022 年 Cambridge University Press から出版予定の *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* という書籍の中の 1 章“Challenges to donor anonymity in Japan”を分担執筆しているため、Kelly 氏とコンタクトをとった。

Ken Daniels (カンタベリー大学講師およびカウンセラー)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 8 月 29 日に開催したオンライン国際フォーラム「出自を知ることがなぜ重要なのか—提供精子で生まれた人たちの経験と思い」にディスカッサントとして登壇してもらった。(本報告書 49 頁参照)

<ヨーロッパ>

Elizabeth Evans (ロンドン大学教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 8 月からイギリスの学術雑誌 *Politics* の編集委員として共同編集長の Evans 教授と交流。

Rainbow Murray (ロンドン大学クイーン・メアリー校教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Rainbow Murray, Vibeke Wang, Ragnhild Louise Muriaas 教授らが *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019 年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を行なっている。

Vibeke Wang (クリスティアン・ミケルセン研究所シニア・リサーチャー)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2013 年以来研究交流。特に *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019 年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を深めている。

Ragnhild Louise Muriaas (ベルゲン大学教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2013 年以来研究交流。特に *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019 年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を深めている。

Guro Korsners Kristensen (ノルウェー科学技術大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2019 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究 (INTPART プロジェクト) の一環として、Kristensen 氏とは日本とノルウェーのファミリープランニングと出生率に関連する比較研究をすすめ、研究の成果として、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same But Different ?* の中の Chapter 11 “A matter of gender (in)quality? Public discourse on declining fertility rate in Japan and Norway” (pp. 173-190) を共同執筆し、2021 年 11 月に Routledge より出版された。(本報告書 91～94 頁参照)

<ヨーロッパ>

Merete Lie (ノルウェー科学技術大学教授)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2019 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究 (INTPART プロジェクト) の一環として、Lie 氏とは日本とノルウェーの生殖医療とジェンダー関連する比較研究をすすめ、研究の成果として、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same But Different ?* の中の Chapter 12 “Assisted reproduction with donated eggs and sperm: A comparison of regulations on assisted reproduction in Norway and Japan” (pp. 191-205) を共同執筆し、2021 年 11 月に Routledge より出版された。(本報告書 91~94 頁参照)

Stine W. Adrian (オールボー大学准教授)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 7 月 2 日に IGS 国際オンラインセミナー「商業的精子バンクに関する問題—倫理・ジェンダー・社会的側面から」に講師として招聘し、「精子提供のしたたかな実践—倫理の国境」と題した報告のあと、商業的精子バンクの是非等について討論した。(本報告書 41 頁参照)

また、2021 年 Adrian 准教授が研究代表としてデンマーク教育研究庁に申請した国際共同研究プロジェクト *Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan* が採択され、仙波もプロジェクトメンバーとして参加し、デンマークと日本の研究者 8 名で共同研究を行う (本報告書 87 頁参照)。2022 年 3 月より本格的にプロジェクトが始動するが、準備段階の打ち合わせ等をオンライン等で行った。

Kirsten MacLeod (エディンバラ・ネピア大学准教授)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 7 月 16 日に IGS 国際オンラインセミナー「生理の貧困」に講師として招聘し、「生理の貧困をテーマにしたドキュメンタリーフィルム“Bleeding Free”から」と題した報告のあと、2 人目の講師、長島美紀氏とともに日英の生理の貧困に関連する問題について討論した (本報告書 45 頁参照)。また日本の他研究機関や大学関係者からドキュメンタリーフィルムに日本語字幕を挿入してほしいという要望があり、マックロード准教授とフィルム製作者らの許可を得て、彼らと連絡を取りながらドキュメンタリーフィルムに日本語字幕を入れる作業をすすめている。2022 年 3 月までには日本語字幕付きのフィルムを完成させ、要望のあるところは無料で視聴できるようにする予定。

<北米>

Melissa Deckman (ワシントンカレッジ教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

第 10 回 JAWS (日本開催、オンライン) にてパネリスト担当。(本報告書 98 頁参照)。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

韓国女性政策研究院

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 9 月 1 日～30 日まで Visiting Scholar として招聘を受ける。同院開催の国際フォーラムにキーノートスピーカーとして登壇したほか、研究プロジェクトに関する諮問など、各種の研究プロジェクトに参加した。

韓国ジェンダー政治研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年～2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表的性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」（本報告書 85 頁参照）。

ソウル大学日本研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員、ならびに、共同研究プロジェクト『思想と文学』共同研究員を務める。

ソウル大学国際問題研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Social Science Korea 「East Asian International Relations Theory」共同研究員。東アジアの国際関係理論におけるフェミニスト国際政治、日本研究を担当。研究グループで共著『主権と比較地域秩序』を出版（韓国語、2020 年）

コンラート・アデナウアー財団シンガポールオフィス

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

コンラート・アデナウアー財団のシンガポールオフィスが支援する共同研究プロジェクト「Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study」に共同研究者として参加した。研究成果は書籍 Substantive Representation of Women in Asian Parliaments として 2022 年 8 月に Routledge 社から出版される（本報告書 84 頁参照）。

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

西江大学社会科学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

『社会科学研究』編集委員

釜山大学女性学研究所

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

『女性学研究』編集委員

香港浸會大学社会科学院・文学院

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

担当教員が社会科学院・文学院の共同プログラムであるジェンダー研究専修課程の所属教員らとのあいだで研究交流を実施している。

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 教授）、平野恵子（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム「AIT ワークショップ」は、新型コロナウイルス感染症拡大のため今年度は実施できなかったが、20 年におよぶ交流の内容を 20 周年記念報告書にまとめて刊行した（本報告書 89～90 頁参照）。

インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター

【担当】平野恵子（IGS 特任講師）Kristi Poerwandari（インドネシア大学教員、センター員）

【共同研究・研究交流の概要】

2008 年以降、定期的に研究交流を実施している。2021 年度も継続して、Kristi Poerwandari 氏（インドネシア大学教員）との共同研究「日本、インドネシアにおける母―成人娘間の愛着、コンフリクト、ジェンダー構築」を推進し、比較調査を行った。

サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学 インドネシア女性・ジェンダー・子供学会

【担当】平野恵子（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

当学会が刊行する学術雑誌 *Salasika* の海外査読者を務める。 <http://salasika.org/index.php/SJ/reviewers>

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター

【担当】石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長／グローバル女性リーダー育成研究機構長）、戸谷陽子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、仙波由加里（IGS 特任講師）、吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー／お茶の水女子大学リエゾン・URA センターリサーチ・アドミニストレーター）、佐野潤子（IGS 研究協力員）ほか

【共同研究・研究交流の概要】

2017 年 4 月の NTNU 研究者本学来訪及び国際シンポジウム登壇を起点に研究交流始動。ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクト（2019～2022 年度）では、共同研究、研究者および大学院生の相互派遣、国際シンポジウム・セミナー・ワークショップ開催などの事業を展開し、2021 年 11 月には共同研究の成果書籍『Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?』を Routledge 社から刊行した。また、INTPART プロジェクトをさらに発展させる目的で立ち上げられた新規の教育交流プロジェクト（DIKU）が、ノルウェーの高等教育の国際連携推進の助成金を獲得し、2021～2025 年度に学部生、院生らの交換研修事業が実施される（本報告書 86 頁、91～94 頁参照）。

オールボー大学 文化・学習学科

【担当】仙波由加里（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年オールボー大学の Stine Adrian 准教授が研究代表としてデンマーク教育研究庁に申請した国際共同研究プロジェクト Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan が採択され、2022 年 3 月より始動する。主にデンマークと日本の配偶子提供に関して共同研究を進める。研究メンバーは、Adrian 教授の他、Janne Rothmar Herrmann（コペンハーゲン大学教授）、Tine Ravn,（オーフス大学准教授）、柘植あづみ（明治学院大学教授）、白井千晶（静岡大学教授）、仙波由加里（お茶の水女子大学ジェンダー研究所特任講師）、小門穂（神戸薬科大学准教授）、由井秀樹（山梨大学特任助教）である（本報告書 87 頁参照）。

【国内外関連研究会】

- 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Women and Diversity in East asian political Representation (WondeR)）（申）
- 日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）
- 日本政治学会 年報政治学「コロナとジェンダー特集」研究会（申）
- 国際移動とジェンダー研究会（大橋・平野）
- 経済理論学会分野別分科会・ジェンダー（大橋）
- 国立精神・神経医療研究センター臨床研究支援部研究プロジェクト「筋ジストロフィーの発症前・早期診断および早期治療における倫理的課題の検討」研究会（仙波）
- 国際ジェンダー学会「開発とジェンダー」研究会（平野）
- 国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク
ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

2) 国際共同研究プロジェクト

ジェンダー研究所所属メンバーは、各国の研究者たちと国際共同研究プロジェクトを推進している。

プロジェクトタイトル	
Substantive Representation of Women Parliamentarians and Gender Equality in Asia: A Comparative Study	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Devin K. Joshi	Singapore Management University
【研究分担者】	
申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
衛藤幹子	法政大学
Chang-Ling Huang	国立台湾大学
Ella S. Prihatini	Universitas Bina Nusantara
Ummu Atiyah Ahmad Zakuan	Universiti Utara Malaysia
Jean Encinas-Franco	University of the Philippines, Diliman
Sara Niner	Monash University
Therese Thi Phuong Tam Nguyen	Universidade Nacional Timor Lorosa'e
Syeda Lasna Kabir	University of Dhaka
Aashiyana Adhikari	Center for South Asian Studies
Ruwanthi Jayasekara	Institute of National Security Studies
研究プロジェクト概要	
コンラート・アデナウアー財団（ドイツの政治財団（シンクタンク）、現理事はメルケル元首相）のシンガポールオフィスが支援する国際共同研究プロジェクト。バングラデシュ、インドネシア、日本、マレーシア、ネパール、フィリピン、韓国、スリランカ、台湾、東ティモールなど、アジア各国の国会における女性の代表性を調査・分析する。研究成果は書籍 <i>Substantive Representation of Women in Asian Parliaments</i> として 2022 年 8 月に Routledge 社から出版される（本報告書 23 頁参照）。	

プロジェクトタイトル

東アジアにおけるジェンダーと政治

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
三浦まり	上智大学
Jackie Steele	名古屋大学
Chang-ling Huang	国立台湾大学
Wan-ying Yang	台湾国立政治大学

研究プロジェクト概要

東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一樣ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2019 年度に成果をまとめ国内外で成果発表を行った。また日本の国会議員を対象とする 2 度目のアンケート調査も実施した。2021 年は海外の学術雑誌に投稿のために論文執筆に取り組んだ。

プロジェクトタイトル

議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析 韓国・日本・台湾比較分析

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
【研究分担者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所

研究プロジェクト概要

2016 年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクトの韓国調査を実施。2019 年度は、成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れた。2021 年度は引き続き英語論文を執筆して政治資金に関する制度がどのように女性の政治参画に影響を与えるのかを分析した論文を投稿して掲載が決定された。

プロジェクトタイトル	
<i>Politics & Gender</i> Critical Perspectives 「#MeToo in East Asia」	
メンバー	メンバー所属研究機関
【共同責任編集者】	
申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Chang-Ling Huang	国立台湾大学
Mari Miura	上智大学
Ruby Y.S. Lai	嶺南大学
Chao-ju Chen	台湾法律学院
Jing Xiong	活動家
研究プロジェクト概要	
<i>Politics & Gender</i>（アメリカ政治学会学会誌）の Critical Perspectives セッションに「#MeToo in East Asia」特集を企画し、台湾、香港、中国の研究者らと日本を含む東アジア 5 カ国における#MeToo 運動に関する事例研究を紹介（2021 年 9 月発行）。	

プロジェクトタイトル	
Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】石井クンツ昌子	
Guro Kristensen	お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
【研究分担者】戸谷陽子	
小玉亮子	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／基幹研究院人文科学系
吉原公美	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系／ジェンダー研究所
佐野潤子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
松田デレク	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／リエゾン・URA センター
Priscilla Ringrose	慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター
Siri Øyslebø Sørensen	お茶の水女子大学国際教育センター
Jennifer Branlat	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
研究プロジェクト概要	
ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金（INTPART）による、2019～2021 年度の 3 年間に渡る国際共同プロジェクト。お茶の水女子大学ジェンダー研究所とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターの所属員が参加。家族、教育とジェンダー、生殖医療などの領域で、ノルウェーと日本の国際比較研究に取り組むほか、互いの大学に滞在しての在外研修や、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催といった活動を進める。共同研究の成果を Routledge 社から刊行。新型コロナウイルス感染症の影響により在外研修の実施が滞っていることから、事業終了が 1 年延期され、2022 年度までとなった（本報告書 22 頁、91～94 頁参照）。	

プロジェクトタイトル	
Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 小林誠	お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所／基幹研究院人間科学系
Guro Kristensen	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
【研究分担者】 戸谷陽子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／基幹研究院人文科学系
石井クンツ昌子	お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構
松田デレク	お茶の水女子大学国際教育センター
岡村利恵	お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所
吉原公美	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／リエゾン・URA センター
Priscilla Ringrose	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
Siri Øyslebø Sørensen	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
Jennifer Branlat	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
研究プロジェクト概要	
ノルウェー高等教育国際連携推進機関（Diku）の UTFORSK 助成金による、2021～2025 年度の 4 年間にわたる国際共同プロジェクト。お茶の水女子大学グローバル女性リーダー育成研究機構とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターの所属員が参加。ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築するプロジェクト。学生、若手研究者、教員が、パートナー大学での共同セミナーや共同指導を経験するなど、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。研究発表や産学連携への参与など若手研究者への機会提供や、論文の共同執筆など研究者同士の将来的なパートナーシップ発展につながる活動も行う。2021 年度はオンラインでのプロジェクト会議を実施し、プロジェクト計画についての話し合いを持った。相互訪問を含む本格的なプロジェクト事業は 2022 年度より実施（本報告書 22 頁、93～94 頁参照）。	

プロジェクトタイトル	
Reconceiving Donor Conception in Denmark and Japan	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Stine W. Adrian	Aalborg University
【研究分担者】 Tine Ravn	Aarhus University
Janne Rothmar Herrmann	University of Copenhagen
柘植あづみ	明治学院大学
白井千晶	静岡大学
小門穂	神戸薬科大学
由井秀樹	山梨大学
仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
研究プロジェクト概要	
本プロジェクトでは、デンマークの研究者 3 名と日本の研究者 5 名で、デンマークと日本のドナーの確保を含む精子バンクの状況を調査し、それらの調査を通して、安全性を確保するためのドナーのスクリーニングの在り方やドナーへの報酬の是非、ドナーの匿名性の問題等について検討し、その結果を政府や社会に向けて発信していく（本報告書 23 頁参照）。	

プロジェクトタイトル

人民公社期の中国農村における生活秩序の変化とジェンダー

メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】堀口正	大阪公立大学
【研究分担者】大橋史恵	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
江口伸吾	南山大学
南裕子	一橋大学
松木洋人	大阪公立大学
閻美芳	早稲田大学
劉楠	山梨英和大学
岩島史	同志社大学
李亜コウ	お茶の水女子大学基幹研究院リサーチフェロー
鐘仁耀	中国・華東師範大学
李晶	中国・華東師範大学
張継元	中国・華東師範大学
王橋	中国・社会科学院

研究プロジェクト概要

本研究は科研費・国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））を受け、2021 年 12 月から 2025 年 3 月にかけて実施される国際共同研究のプロジェクトである。人民公社期（1950 年代～70 年代）の中国農村における生活秩序の変化とジェンダーについて、資源配分のあり方に着目して、実証的に検討することを目的とする（本報告書 21 頁参照）。

中国農村では、1949 年の「暫定憲法」や 50 年の「婚姻法」「土地改革法」の公布、また人民公社制度の展開により、封建的な慣習の廃絶が進められるとともに男女平等の制度的基盤が構築されていった。ところが、生産労働への参加の程度の男女差（労働点数に対する女性差別の存在も）、耕地や水利施設などの共有資源へのアクセスに女性と男性とでどの程度違いがあったのかなど、不明な点が多い。さらに公共食堂や託児所の現実的な利用状況、家事やケアなど再生産労働の性別分業についても、研究の空白部分になっている。

以上のことから、①各地農村における人民公社期の資源配分のあり方を解明すること、②世帯内外における生産・再生産労働の労働力配置の実態を考察し、「村」や「家」の権力関係や規範にどのような揺らぎがあったのかを解明すること、③さらに①②と関係する問題として、国家レベルの指針や計画生育が基層社会における生活秩序に与えた影響を解明する。

2021 年度は 11 月 21 日に Zoom で研究会を実施した。

3) AIT ワークショップ

ジェンダー研究所が運営主体を務める国際研究交流プロジェクト

タイのアジア工科大学院大学（AIT）とジェンダー研究所による若手研究者国際交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology (AIT)）とにより実施されている、国際研究交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、日本ではジェンダー研究所が、タイでは AIT・環境資源開発研究科が運営主体となり、AIT で実施されるワークショップへの本学院生派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、国際研究交流事業をほぼ毎年実施している。お茶大ではもっとも歴史が長い国際研究交流プログラムである。

2009 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れた。

AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development
2002	Gender, Work and Globalization
2003	Women, Globalization and Home-based Work
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan
2011	Gender and Disaster 〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment
2015	Labor, Sexuality and Empowerment
2016	Labor and Association from Gender Perspective
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives
2019	Gender and Empowerment in Urban Space

大学院講義「国際社会ジェンダー論」での学習とグローバルなフィールドでの実践・交流

本ワークショップの日本からの参加者は、春学期に大学院科目「フィールドワーク方法論」を履修し、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査方法を学ぶ。その後にアジア諸国の将来を担う多彩な人材が集う AIT での研修に参加し、フィールドワークに基づく研究の基礎を実践的に学習する。また各国の院生たちとワークショップで研究交流することで、彼らの熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから研究者としての刺激を得る。帰国してからはジェンダー研究所所属教員が担当する「国際社会ジェンダー論」（本報告書 102 頁参照）にて、タイで得た知見を共有し、国際社会におけるジェンダーの問題の理論的検討を通じて、さらに理解を深める。また参加者は毎年、報告書をまとめている。

ジェンダー研究所は、このような大学院生の国際研究交流プログラムを提供し、大学院生の教育キャリアを補強することで、次世代のジェンダー研究者、あるいは、NGO や国際機関で国際協力の仕事につく人材の養成に持続的に取り組んでいる。

■2021 年度 AIT ワークショップについて

新型コロナウイルス感染症拡大のため今年度も実施は見送られたものの、大学院講義「国際社会ジェンダー論」（本報告書 102 頁参照）の一環として「ジェンダーと開発」分野における実践専門家を招き、実践における理論の在り方を学ぶ機会を設けた。具体的には、IGS セミナー（学内限定）「教育とジェンダー、世界と日本：2030 年にむけて今日の課題」（本報告書 58 頁参照）と、IGS セミナー（一般公開）「国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ」（本報告書 60 頁参照）をジェンダー研究所所属教員が開催した。

また昨年度（2020 年度）開催した AIT ワークショップをめぐる国際シンポジウムを基に、本交流事業 20 周年を記念する報告書を刊行した。本報告書は、2001 年度から 20 年度までに実施したワークショップの記録である。但し、2020 年度は新型コロナウイルス感染症拡大により渡航不可であったことから、その代替として実施した「お茶大—AIT20 周年記念シンポジウム 開発・教育・ジェンダー」における各登壇者の報告概要を第一部として掲載している。第二部には、各年度の日程、参加者氏名およびワークショップ時の写真を、各資料や当時の参加者から可能な限り収集し収めた。

本ワークショップは年度を経るごとに単位認定される大学院教育プログラムとして整備されていくが、それを支えた教員、コーディネーター（博士後期課程学生）など関係者一覧も巻末に掲載している。

「ジェンダーと開発（Gender and Development: GAD）」にかかわる課題群の分析方法や視座、また海外におけるフィールドワークの基礎を学ぶことが目的の本プログラムによって、参加者は国際協力や開発援助、市民運動に直に触れ、フェミニスト視点から議論する機会を得ることができたといえるだろう。IGS が長期継続的に取り組んできた国際的連携の下での本教育プロジェクトによって、20 年間で多くの研究交流が生まれたことを示す報告書となった。



4) INTPART プロジェクト

国際比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

■概要

ノルウェーリサーチカウンスルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) プロジェクト。ノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターと IGS とで、2019～2021 年度の 3 年間にわたって、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等についての比較研究、セミナーやワークショップの開催などを進め、共同研究の成果を書籍として刊行する。

■プロジェクト構成（相互に連携する 6 つのワークパッケージ (WP)）

WP1 プロジェクト管理：NTNU とお茶大の代表が高水準の生産性と創造性を担保。

WP2 在外研修：両大学の院生、教員、研究者がパートナー大学に滞在して教育交流や在外研究を行う。

WP3 院生共同指導：両大学の教員が、大学院生の研究プロジェクトの共同指導を行う。

WP4 合同カリキュラム開発と交換教育：質の高い研究に基づく国際的な教育プログラムを開発。

WP5 共同出版と年次ワークショップの開催：アンソロジー刊行プロジェクト

WP6 広報・成果普及とセミナー開催：公開イベントの開催などプロジェクト成果の発信

■2021 年度プロジェクトメンバー

《NTNU》

グロ・コースニス・クリステンセン（学際的文化研究学部長・教授：プロジェクトマネージャー）

ジェニファー・ブロンラ（ポストドク研究員：プロジェクトコーディネーター）

プリシラ・リングローズ（教授）

シリ・エイスレボ・ソレンセン（ジェンダー研究センター長・教授）

《IGS》

石井クンツ昌子（お茶の水女子大学理事・副学長：本学側代表）

戸谷陽子（IGS 所長／基幹研究院人文科学系教授）

小玉亮子（IGS 研究員／基幹研究院人間科学系教授）

仙波由加里（IGS 特任講師）

吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー／リサーチ・アドミニストレーター：事務局）

松田デレク（国際教育センター講師）

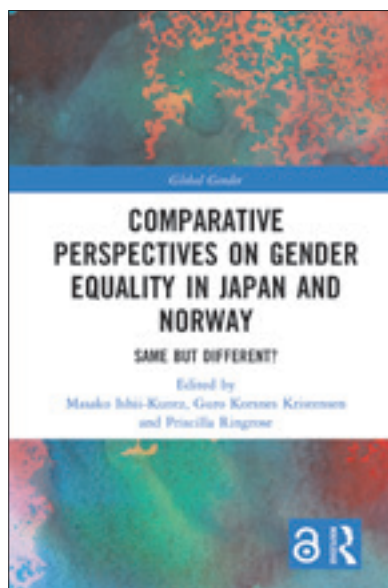
佐野潤子（IGS 研究協力員／慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師）

■2021 年度事業内容

新型コロナウイルス感染症まん延防止対策の影響により、研究者および大学院生の相互派遣が実施できずにいるが、そうした中でも、研究活動は活発に進められ、11 月末に国際比較研究の成果書籍が海外の出版社から刊行された。また、本プロジェクトが進めてきたジェンダー研究教育交流をさらに発展させる目的で立ち上げられた新規の教育交流プロジェクト（DIKU）が、ノルウェーの高等教育の国際連携推進の助成金を獲得した。

①書籍刊行プロジェクト

ノルウェーと日本の研究者による共同研究チームを編成して進めてきた国際比較研究の成果書籍『Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?』が 11 月末に Routledge 社から刊行された。プロジェクトメンバー以外の研究者も参加し、広範なテーマの論考をまとめたアンソロジーとなった。ノルウェーと日本のジェンダー状況を様々な視点で比較分析した論文 14 章が、家族、教育、メディアなどのテーマ別に分類されている。ハードカバー書籍の発売と同時にオープンアクセスの電子書籍も刊行されており、出版社のサイトから全ページ無料でダウンロードして読むことができる。



Comparative Perspectives on Gender Equality in Japan and Norway: Same but Different?

石井クンツ昌子、グロ・コースニス・クリステンセン、
プリシラ・リングローズ（編著）

【初版刊行年】 2021 年

【e-Book 刊行日】 2021 年 11 月 29 日

【出版社】 Routledge

【DOI】 <https://doi.org/10.4324/9781003185222>

【ページ数】 252 ページ

【オープンアクセス資金提供】 Knowledge Unlatched GmbH

《目次》

1. Introduction: Comparative perspectives on gender in Japan and Norway
Masako Ishii-Kuntz, Guro Korsnes Kristensen and Priscilla Ringrose

PART I: Family and home

2. Gender and home in Japan and Norway: Considering the past and contemplating the future
Guro Korsnes Kristensen, Priscilla Ringrose, and Masako Ishii-Kuntz
3. Caring masculinity: Fathers' childcare in Japan and Norway
Masako Ishii-Kuntz

PART II: Education

4. Education and gender in Japan and Norway from historical perspective
Ryoko Kodama

5. Creating more equal partnerships: Home Economics education and gender equality in Japan and Norway
Jennifer Branlat and Junko Sano
6. Teaching with feminist values: A dialogical narrative analysis of gender studies educator narratives
Jennifer Branlat
7. Making it in academia: A study of career narratives of men and women professors in Norway and Japan
Vivian Anette Lagesen, Guro Korsnes Kristensen, Siri Øyslebø Sørensen, and Derek Matsuda

PART III: Media

8. Masculinity in contemporary Viking and Samurai comedies: 'It's not really me, that fear-based leadership style stuff'
Jennifer Branlat and Priscilla Ringrose
9. Work-life balance and equality observed through advertising during the COVID-19 pandemic in Japan and Norway
Chihiro Wada and Roger A. Søraa

PART IV: Sexuality and reproduction

10. The struggle to belong: Trans and gender-diverse experiences in Japan and Norway
france rose hartline and Keiichiro Ishimaru
11. A matter of gender (in)equality? Public discourses on declining fertility in Japan and Norway
Guro Korsnes Kristensen and Yukari Semba
12. Assisted reproduction with donated eggs and sperm: A comparison of regulations on assisted reproduction in Norway and Japan
Merete Lie and Yukari Semba

PART V: Dialogue

13. Becoming a feminist academic in Japan and Norway: A dialogue with Professors Masako Ishii-Kuntz and Agnes Bolsø
Jennifer Branlat, Agnes Bolsø, and Masako Ishii-Kuntz

Conclusions

14. Conclusion: Comparative perspectives on gender equality in Japan and Norway: Reflections and lesson learnt
Priscilla Ringrose, Masako Ishii-Kuntz, and Guro Korsnes Kristensen

②新規プロジェクトの立ち上げ

これまでに IGS と NTNU ジェンダー研究センターで進めてきた研究教育交流をさらに発展させる目的で、新たな教育交流プロジェクトが立ち上げられ、Norwegian Agency for International Cooperation and Quality Enhancement in Higher Education (DIKU) の UTFORSK プログラム助成金に採択された。INTPART は大学院生以上の交換派遣が中心であるが、この新規プロジェクトは学部生も対象であり、また、パートナー大学への滞在期間も 3 か月以上が原則になる。新型コロナウイルス感染症の影響で、派遣は開始できていないが、早期に国際移動の自由が回復されることを願いつつ、両大学では本プロジェクトによる教育プログラムの検討が進められている。以下は、助成金の申請書に記載した事業内容の抜粋。

【プロジェクトタイトル】 Teaching Gender Equality and Diversity in Norway and Japan

【プロジェクト期間】 2021 年 8 月 1 日～2025 年 7 月 31 日

【事業目的】 現行の INTPART プロジェクトで築いたパートナーシップと研究成果を基礎に、ジェンダーおよびダイバーシティ研究教育の質を高めるための新しい教育戦略を構築する。学生をはじめ、若手研究者、教員に至るすべてのレベルで、質が高く活力に満ちた、国際的な学びの環境を提供する。SDGs のジェンダー・ダイバーシティ関連の目標達成に資する成果を目指す。

【組織とメンバー】

	NTNU	本学
部局	学際的文化研究学部(ジェンダー研究センターの所属組織)	グローバルリーダーシップ研究所 (IGL) ジェンダー研究所
部局代表	Margarethe Aune (学部長)	小林誠 (IGL 所長)
コーディネーター	グロ・クリステンセン	戸谷陽子
メンバー	シリ・ソレンセン プリシラ・リングローズ ジェニファー・ブロンラ	石井クンツ昌子 松田デレク 岡村利恵 (IGL 特任講師)

【主な事業内容】

(1) 学部生、院生、教員のパートナー大学での研修 (3 カ月程度)

・ NTNU→本学：学部生／M 院生 8 名、D 院生 2 名、教員 2 名 (2022 年と 2024 年に実施予定)
(サマープログラム参加を含む予定)

・ 本学→NTNU：学部生／M 院生 8 名、D 院生 2 名、教員 2 名 (2023 年と 2025 年に実施予定)
(NTNU が実施する英語による講義「Gender and Norwegian Culture」などへの出席が可能)

(2) 共同セミナーの実施と院生の共同指導

(3) 若手研究者への機会提供 (研究発表や産学連携)

(4) 成果発信、論文の共同執筆、将来的なパートナーシップ発展につながる活動

■2021 年度事業成果

国際移動の制限が続く中ではあったが、編者そして執筆者らの努力により、共同研究の成果書籍を遅延なく刊行することができた。また、電子書籍版がオープンアクセスとなったことで、研究成果の広範な頒布が可能になり、また今後の教育連携のプログラムへの活用が容易になった。2020 年度以降、相互派遣が実施できていないことから、ノルウェーリサーチカウンシルに 1 年間のプロジェクト延長を申請し承認され、INTPART プロジェクトは 2022 年度も継続する運びとなった。また、これまでに本学と NTNU が積み重ねてきた研究教育連携の実績が評価され、新規プロジェクトの助成金採択が決定した。パンデミックの長期化という困難がある中で、このような成果を上げることができたことは、喜ばしいことである。相互派遣の再開を待ち望む日々が続いているが、パンデミック下で重ねられている研究教育現場での創意工夫を本プロジェクトにおいても活用し、事業活動の充実と発展に努める所存である。

5) JAWS

ジェンダー研究所は、次世代ジェンダー研究者を養成するための持続的な国際研究交流ネットワークの形成に取り組んできた。そのひとつが「AIT ワークショップ」（本報告書 89 頁参照）であり、もうひとつの代表的な活動が「日本－アメリカ女性政治学者シンポジウム」（Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS）である。

JAWS は、政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが、日本とアメリカで交互に集まって研究交流を行うユニークな研究ネットワークである。参加者は、互いの研究交流はもちろん、若手研究者に参加を促して国際的な視点を身につけてもらおうと共に、政治学分野でマイノリティーである若手女性研究者にメンタリングを行う。ジェンダー研究所は JAWS の活動拠点として、日本が開催地となる際は、研究集会・国際シンポジウムを主催し、成果発信にも努めている。

■概要と歴史変遷

JAWS の歴史は 2000 年の夏に遡る。2000 年にアメリカン大学（American University）のカレン・オコナー（Karen O'Connor）教授が、同大学に「女性と政治研究所」（The Women and Politics Institute）を開設したことを記念して「女性と政治に関する比較政治学」ワークショップを主催したことがその始まりである。このワークショップに、アメリカ政治学会と日米友好基金（The Japan-US Friendship Commission）の支援を得て日本から 5 名の研究者が招かれ、同じく招かれた 7 名のアメリカの研究者らと 3 日間にわたって研究交流が行われた。

当時、日本の政治学の分野では、女性政治学者がとりわけ少数であったのみならず、ジェンダー視点に基づいた研究は、政治学研究としてほとんど関心を持たれていなかった。これがさらに若手女性研究者を遠ざけ、「女性と政治」分野の研究が進まない原因となっていた。そんな中で始まったアメリカの研究者との交流は、日本の研究者にとって国際的な研究動向に触れることに加え、日本で女性研究者が政治学を研究するときぶつかる様々な壁について議論する場も提供した。女性研究者の地位向上や女性研究者が行っている研究への評価という問題は、アメリカの女性研究者らにとっても共通の課題であった。

JAWS を始めたアメリカの女性研究者、M・マーガレット・コンウェイ（M. Margaret Conway）、カレン・オコナー、マリアン・パリー（Marian Palley）は、そのような女性研究者の課題に取り組んできた「女性と政治」研究のパイオニアであった。彼女らは同分野の女性研究者を励ましてサポートするだけでなく、自ら質の高い論文を政治学ジャーナルに発表することで、「女性と政治」研究を正統性のある政治学の研究として位置付けることに貢献したのである。JAWS を通じての交流により、日本の研究者とアメリカの若手研究者たちはアメリカの第一世代女性研究者らの経験を共有し、大きな励ましを得ることができた。例えば、2000 年の第 1 回 JAWS ワークショップの参加者たちは、後にアメリカ政治学会の実行委員長 Rob Hauck の協力を得て学会誌『PS: Political Science & Politics』の 2001 年 6 月号に論文を掲載した。この掲載をきっかけに JAWS の日本参加者らは日本の政治学会でも注目されることになり、彼女らの研究も認められるようになったと回顧する。岩本美砂子（三重大学）、大海篤子（お茶の水女子大学）は福岡市で開催された 2006 年世界政治学会（IPSA）の準備委員も務めた。

このように JAWS は日本の研究者たちに、アメリカの女性研究者との交流による研究やキャリアの発展、アメリカ政治学会での研究発表、長期にわたってのメンタリングの機会を与えてくれた。アメリカ

の研究者にとっても、日本で研究発表を行う機会、日本の女性研究者とのネットワーク形成、若手研究者のキャリア開発へと繋がった。歴代の JAWS に参加した日米の女性研究者らは、互いの社会の相違点を認識しつつ、それぞれの場で女性研究者が直面する課題に取り組み、国際的な視点で研究を進めていく貴重な経験を得たのである。

JAWS は 2000 年から現在に至るまで、日米友好基金等の支援を得て 9 回研究集会を実施した。その概要を簡単に以下に振り返る。

第 2 回：マリアン・パリー教授（デラウェア大学,University of Delaware）が 2001 年サンフランシスコで開かれたアメリカ政治学会で「Women in Japan and the US」をテーマに企画し、12 名が参加。

第 3 回：2002 年に日本で開催。アメリカから 3 名が参加した。三重大学、お茶の水女子大学のジェンダー研究センターで研究集会を開催した他、女性議員、地方議員、アクティビスト達に面会した。

第 4 回：2003 年、デラウェア大学とアメリカ政治学会（フィラデルフィア市）で開催され、新たに若手研究者が日本から 3 名、アメリカから 2 名加わった。この時の成果として、2004 年 1 月号の『PS: Political Science & Politics』に論文要約が掲載された。論文全文はアメリカ政治学会ウェブサイトの Special E-Symposium で公開された。

第 5 回：2007 年にジュリー・ドーラン（Julie Dolan）准教授（マカレスター・カレッジ,Macalester College）とアメリカ政治学会（APSA）の Bahram Rajaei の企画によって開かれた。APSA（シカゴ市）では「女性と外交」を題したパネルを構成した他、マカレスター・カレッジ（ミネソタ州セントポール市）で研究集会が開かれた。14 名の日米女性研究者が参加した。

第 6 回：2009 年、再び日本で開かれアメリカから 6 名の研究者が来日した。アメリカ大統領選挙に挑んだヒラリー・クリントンとサラ・ペイリンに関する研究、アメリカの少数政党における女性の役割、下院議員のスピーチ分析、医療政策と女性など最新の研究を報告した。日本の参加者も女性と地方議会、投票行動、女性議員のリクルートメント、女性国会議員に関する研究を発表した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センターはドイツ日本研究所（German Institute for Japanese Studies）と共に東京の研究集会を主催した。アメリカの研究者らは東京都世田谷区の生活者ネットワークを訪問、さらに富山県で行われた母親大会でも研究発表し好評を得た。

第 7 回：2010 年に、メリッサ・デックマン（Melissa Deckman）准教授（ワシントン・カレッジ,Washington College）と APSA の Bahram Rajaei の企画によってアメリカで開催された。参加者は「Gender, Politics and Policy: Post-Elections」をテーマにワシントン・カレッジ（メリーランド州）とアメリカ政治学会（Washington DC）で研究報告を行った。2010 年の JAWS は日米から 19 名が参加し、それまでで最大規模となった。

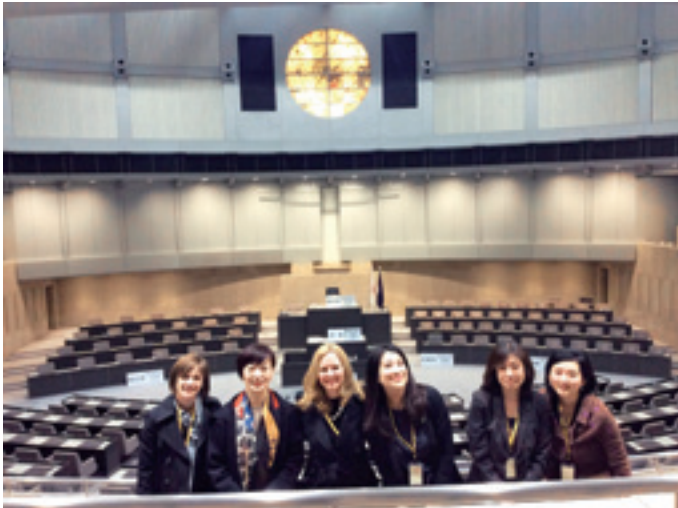
■JAWS 第 8 回

第 8 回は時をおいて 2017 年に日本で再開された（しばらく開催されなかったのは資金上の問題と第一世代の高齢化による）。

JAWS の再開を兼ねてジェンダー研究所がアメリカからジュリー・ドーランとメリッサ・デックマン（マリアン・パリー教授も来日予定だったが、悪



第 8 回 JAWS、お茶の水女子大学での研究交流会



第 8 回 JAWS、東京都議会訪問

天候により断念した)を招聘し、国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか?」を開催した。130 名を超える多くの聴衆が集まり大盛況だった。このほか、東京都議会訪問や、JAWS の新旧メンバー、ジェンダー研究所の研究者、お茶大の院生らとの研究交流も行った。

この時の成果は 2018 年刊行の『ジェンダー研究』21 号の特集「Gender and Political Leadership」に掲載された。

アメリカ政治学会における JAWS HP→<https://connect.apsanet.org/jaws/>

■JAWS 2018 年度成果

2018 年 JAWS (第 9 回) 「ジェンダーと民主主義」 “Gender and Democracy”

(8 月 28 日～31 日、マサチューセッツ州、ボストン)

2018 年、第 9 回 JAWS がアメリカ政治学会の協力を得てボストンで 4 日間開催された。ボストン市にあるサフォーク大学のローゼンバーグ東アジア研究所は、研究集会の場所とレセプションを提供してくれた。今年から第一世代の JAWS メンバーは引退した形となり、申瑛榮 (ジェンダー研究所)、メリッサ・デックマンが引き続きファシリテーターとして参加した以外は、全員新しいメンバーが参加した。

今回はリンダ・ハスヌマ (Linda Hasunuma) (ブリッジポート大学, University of Bridgeport) と三浦まり (上智大学) が加わり、アメリカ政治学会の国際交流担当の Andrew Stinson の協力も得て、アメリカ政治学会と日本政治学会から、若手女性研究者に参加を呼びかけた。最終的に日米からそれぞれ若手研究者を 6 名ずつ、計 12 名を選抜した。

テーマは「ジェンダーと民主主義」(Gender and Democracy) として、4 名のファシリテーターが初日にレクチャーをすることで始まった。12 名の参加者は研究セッションとアメリカ政治学会パネルで、女性運動、女性の政治参画、トランスナショナルな女性連帯、リーダーシップ、政治参加のジェンダーギャップなどについて研究発表を行った。そのほか、キャリア形成、メディアと研究発信、論文の出版などについて議論するセッションも設けた。女性の政治参加に関する大規模な研究を支援している「Barbara Lee Foundation」も訪問し財団の活動についてうかがった。(具体的なスケジュールは

<https://mk0apsaconnectbvy6p6.kinstacdn.com/wp-content/uploads/sites/22/2019/02/2018-JAWS-detailed-schedule.pdf>)

■JAWS 2019 年度成果

JAWS 2018 年の参加者らがアメリカ政治学会で発表した論文をさらに発展させ、アメリカ政治学会の学術雑誌「PS」に投稿した。その内 4 名が採択され掲載予定である。また、JAWS 2020 年 (日本) に向けて、アメリカ政治学会のコーディネーターと協力して資金申請に取り組んだ。

■JAWS 2020 年度成果

2020 年度は日本で開催される予定だったが、資金申請がうまく進まなかったのと、新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックによって移動が制限され、日本政治学会で JAWS のパネルを組んでオンライン発表（9 月 26 日土曜日 13:15~15:15）を行った。参加者と発表論文のタイトルは下記のとおりである。

2020 日本政治学会 JAWS パネル：Intersectional Perspectives of Crisis Politics

1. Melissa Deckman, Washington College （メリッサ・デックマン、ワシントン・カレッジ）

Gender, Age, and Intersectionality in the 2020 Presidential Race

2. 浅野幸子、減災と男女共同参画 研修推進センター・早稲田大学

Impact of COVID-19 on Japanese society: From Gender & Minority Perspective

3. 西田奈保子、福島大学

Gender issues in rebuilding the lives of disaster victims: surveys on post-disaster public housing areas in Fukushima prefecture

Chair

申琪榮、お茶の水女子大学 IGS

Discussants

武田宏子、名古屋大学

本山央子、お茶の水女子大学

■JAWS 2021 年度

今後の活動計画は未定。

6) 国内外招聘研究者一覧

■ 2021 年度 海外からの招聘研究者

【アジア・オセアニア】

権金炫伶（クォン・キム・ヒョニョン）（女性現実研究所・韓国）

IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える」（32 頁参照）
ルイン（トランスジェンダー・クィア研究所・韓国）

IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える」（32 頁参照）
趙成南（チョ・ソンナム）（梨花女子大学校・韓国）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）
日下部京子（アジア工科大学院大学・タイ）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）
コリーナ・リアントプトラ（インドネシア大学・インドネシア）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）
アヴィヤンティ・アジス（インドネシア大学・インドネシア）

IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」（47 頁参照）
ケン・ダニエルズ（カンタベリー大学・ニュージーランド）

IGS 国際フォーラム「出自を知ることがなぜ重要なのか：提供精子で生まれた人たちの経験と思い」（49 頁参照）

ルセッタ Y・L・カム（香港浸會大学・香港）

IGS セミナー「宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性」（62 頁参照）

【ヨーロッパ】

ロージー・キャンベル（キングス・カレッジ・ロンドン・英国）

IGL/IGS 国際シンポジウム「リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践」（35 頁参照）

グロ・クリステンセン（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）
カレン・シャイア（デュースブルグ・エッセン大学・独）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）
スティン・W・エイドリアン（オールボー大学・デンマーク）

IGS セミナー「商業的精子バンクに関する問題：倫理・ジェンダー・社会的側面から」（41 頁参照）
カースティン・マックロード（エディンバラ・ネピア大学・英国）

IGS セミナー「生理の貧困」（45 頁参照）

【北米】

本田桂子（コロンビア大学・米）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）

ジャン・バーズレイ（ノースカロライナ大学チャペルヒル校・米）

IGL/IGS 国際シンポジウム「グローバル女性リーダーシップ：アジアからの提言」（38 頁参照）

■ 2021 年度 国内招聘研究者

吉良智子（日本女子大学）IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」（29 頁参照）

中嶋泉（大阪大学）IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」（29 頁参照）

北原恵（大阪大学）IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」（29 頁参照）

香川檀（武蔵大学）IGS シンポジウム「ジェンダーの視点に基づく美術史研究の現在」（29 頁参照）

菊地夏野（名古屋市立大学）IGS 国際シンポジウム「#MeToo の政治学：#MeToo が残したフェミニズムの課題を考える」（32 頁参照）

大木直子（椙山女学園大学）IGL/IGS 国際シンポジウム「リーダーシップの地平：ジェンダー平等推進のための理論と実践」（35 頁参照）

レティツィア・グアリーニ（国際基督教大学）IGS セミナー「日本文学における父娘関係：欲望・暴力・支配・抵抗」（43 頁参照）

長島美紀（プラン・インターナショナル・ジャパン）IGS セミナー「生理の貧困」（45 頁参照）

巢内尚子（ラバル大学大学院博士後期課程／東京学芸大学）IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」（47 頁参照）

ワオデ・ハニファー・イスティコマー（一橋大学大学院博士後期課程）IGS セミナー「ジェンダー、エスニシティ、技能実習制度」（47 頁参照）

足立加勇（東京造形大学・立教大学）IGS セミナー「戦争と美少女：エンターテインメントとしての戦いの表象」（52 頁参照）

小ヶ谷千穂（フェリス女学院大学）IGS セミナー「移住労働者の子どもたち」（54 頁参照）

高畑幸（静岡県立大学）IGS セミナー「移住労働者の子どもたち」（54 頁参照）

由井秀樹（山梨大学）IGS セミナー「不妊と男性のセクシュアリティ」（56 頁参照）

田中由美子（城西国際大学）IGS セミナー「国際協力とジェンダー・トランスフォーマティブ・アプローチ」（60 頁参照）

張瑋容（同志社女子大学）IGS セミナー「宝塚というランドスケープとジェンダー：ファンダムの文化的・地理的越境とその可能性」（62 頁参照）

英美由紀（藤女子大学）IGS セミナー「『ルッキズム』：女性美をめぐる理論と表象から」（64 頁参照）